來其道分崩、卜部伊勢各自立家、雜佛混儒、伐異黨同、如此凡數百載、學者無所折衷、近時垂加社出障百川而東之、風水風葉之作、似續藤森之功、然而一時門人亦未有升其堂、懿哉先生、圯上取履、到底根究、旁及百氏、蚤見乎天柱國柱之卓、晩登乎神籬磐境之巔、蓋先生之於垂加門墻也、實青於藍、而寒於水者矣、嗚呼哀哉、重遠事先生二十歲于茲、於先生家學庶乎不懵然、晩以禁錮廢講問、日日馳想東海天、天曆妙籌、神道秘奥、北斗仰望、胤子之賢、惟天難諶、胤子先逝、先生老病、悲淚懸泉、未滿七月、先生亦沒、既無庶孽、亦無孫、遺傳忽雲散、東岱前後煙、不知何世有楊子雲、嗚呼哀哉、重遠錄天名壬癸、傳神號鹽土、師說萬一以謀不腐、奈何天南海北猶未及乞郢斧、擧一世莫可質訂、此恨緜緜徹千古、嗚呼哀哉、噫先生之魂、豈與醯鷄甕裏者同乎哉、將沿東海兮、浮遊八極乎、抑攀富山兮、御氣排空也、必其爲列星爲明神、後天後地、以欲觀造物人鬼之所窮焉、顧彼塵世之利名禍福兮、野馬杯水曾何足掛齒牙也、然則重遠等區々奉觴、恣嗟悲泣兮、寧莫爲先生所嘲侮也耶、嗚呼哀哉、尙饗、

〔文會雜記三下〕土州ニテ、曆學ヲ始テセシハ、谷丹三郎（重遠）新蘆面命ヲカキシ男ナリ也、コレハ東都ノ天文生澀川氏ニ學ブト也、谷氏ノ門人ニ川谷貞六ト云人アリ、此人、南海曆談、授時改旋曆書等ヲ著シ、又起元演段ト云筭書ヲ著ス、其門人片岡武次郎、則細川生ノ師也、武次郎、傍通曆、五緯曆、天元筭法等ヲ著ス、又私習曆書ヲ著ス、凡五十卷、未業ヲ卒ヘズ、今四十卷ハ出來セシト也、

〔有德院殿御實紀附錄十五〕數學は、寄合建部彥次郎賢弘とて、名譽の算學者ありしを、小納戸浦上彌五左衞門直方薦め申ければ、玄ばく御垂問あり、ほどなく精微をきはめ玉ひ、さらに聖慮をくはへ玉ひしことゞもありしかば、誠に神明の御方略、凡慮の及ぶ所にあらずと、彥次郎賢弘もふかく感服し、後にはかへりて御教諭を蒙りしとなり、玄かるに天文曆術は、民に時を授るの要務なればとて、これにも專ら御心を用ひ玉ひ、和漢の曆書はさらなり、阿蘭の說までもひろく御穿鑿有けるが、當時用ひらるゝ貞享の曆法は、疎脫多く、誤も又少からざるにやと、天文方澀川助